

Report from the **FD** salon

04-3

龍谷大学 FDサロンレポート

導入教育の模索

近藤 久雄(大学教育開発センター長)

2004年7月6日(火) 於/深草学舎<大学教育開発センター>

「初年次教育」と「導入教育」

今回、「導入教育の模索」というタイトルにしたのは、全国的な大学教育研究の動きや、差し迫った2006年問題等を考えますと、「導入教育」ということについて龍谷大学でも全学的に考えておかねばならない時期に来ているのではないかという問題意識によるものです。「模索」としたのは、私なりに何か具体的な提案やアイデアがあって、それを皆さんにお示ししようと言うのではなく、むしろこれを機会に、学内に「導入教育」についての議論を起こすことができると考えたからです。つまり、導入教育のあり方を議論する場合に大事なことは、どうすればいいのかという技術的な問題よりも、こうした教育の必要性が語られる背後にある教育上の問題点は何かが正確に把握されているか否かということだと思います。

そもそも「導入教育」ないしは「初年次教育」と呼ばれているものは、もともと文化的にも社会的にも多様な学生を受け入れてきたアメリカの大学で、the First Year Experiencesとして実施されていたものを、日本的課題に応用しようとしたものようです。一般的に考えられている日本の課題としては、基礎学力の低下や学力格差あるいは学生の多様化などの問題への対応などが考えられています。しかしながら、そうしたいわば現象的問題への技術的な対応を考える前に、私達は本質的なところで、現代の学生に何がおきているかを見ておく必要があると思います。

学生に何がおきているのか

前回のFDサロン(6月17日開催)に、社会学部の村澤真保呂先生が「管理教育の現状とその対処」というテーマで話をされました。詳細は村澤先生のご報告をお読みいただくとしまして、私からは簡単にご説明をいたしますと、現在学生達に起きていることは、「学力の低下」ではなくて、むしろ「学習意欲の低下」ではないのか、というものです。そして、その背後にあるのは、管理されることに慣れきってしまい、むしろ管理されることによって安心を得る、したがって自ら管理を要求するなどといった精神構造の若者が多くなっているという、いわば社会病理的な状況であるというものでした。

現在の若者達の周りにははっきりとは目に見えない管理の網が掛けられているのであり、それは、こうすればこのように役に立つから頑張りなさい、こうしておけばいい評価を得られて、大学への推薦あるいは企業への推薦に結びつきますなどといった、学生の自主的な学びとはおおよそ縁遠い、勉強の強制という管理の網であります。こうした傾向は近年ますます強くなっているようにさえ感じられます。

学習意欲の低下につきましては、東京大学の佐藤学氏がその著書『学力を問い直す』(岩波ブックレット)の中で、「学びからの逃走」ということばで、学校外における自主的な学習時間の減少、および自ら学習する生徒数の減少が起きていることを説明しておられます。そして、この現象がシンガポール、韓国、香港、台湾そして日本などの東アジアに特徴的なものであると指摘しておられます。これらの国々は、いずれも国際的な学力

検査ではその成績が1位から5位の国々であるにも関わらず、自主的な学習という指標から見た場合には、むしろ問題を抱えた国々であるというわけです。

佐藤氏は、こうした現象の背後に、これらの国々で進行しつつある社会的変化に注目しています。つまり、これらの国々はいずれも急速な経済成長を経験し、社会が産業主義社会からポスト産業主義社会へと移行しつつある社会であるというわけです。

産業主義社会とは、言うまでもなく、物の生産と消費を中心とした社会であります。そうした社会では、教育も当然産業主義社会に適応して行く人材を育成する方向に向けられます。いわば「勉強」によって基礎学力をつけ、さらにその上に学力を積み上げることにより、生産のより重要な部分に携わることが可能となり、結果的に社会階層間を「上へ向かって」移動できるのです。現在経済発展を続ける中国などは、今まさにこうした社会の段階にあると言ってもよいでしょう。

よりよい就職口を求めて熱心に英語学習に励む中国人学生の姿は、まさに社会階層的上昇を目指して努力する若者の姿そのものであります。実は先に挙げました東アジアの5つの国々も、つい先ごろまでそうした社会でした。努力して「勉強」することによって未来が開ける、とみんなが考える社会であったわけです。佐藤氏はこうした社会で行われてきた教育を「東アジア型の教育」と名づけています。「東アジア型の教育」とは、見方によっては、産業社会の価値観を覚えさせ身につけさせるための管理された訓練の世界であると言ってもいいかもしれません。

これに対して、ポスト産業主義社会とは、知識の創造と交流を中心とした社会であります。具体的には音楽産業やIT産業などを考えると分かりやすいかもしれません。こうした社会の特徴は、「基礎学力」だけでは労働市場に参加することはできません。つまり、知的に高いレベルの人材の需要は拡大する一方で、基礎学力を身につけた人材の市場は海外へと移っているのです。こうした社会に暮らす若者にとっては、「将来必要な基礎学力をつけるために勉強する」ことは白々しく虚しい営みにしか見えないのです。しかしながら、親の世代も、また多くの教育機関も、未だに「東アジア型の教育」を若者に強いることを続けていることが多いのです。その結果、若者達は、自分にとってその意義を見出せない勉強を強いられ、それによって競争させられ、悩み傷ついているのが現在の我が国の教育が抱えている問題であろうと思われまます。

こうしたポスト産業社会に生きる若者の心に起こっている問題を、佐藤氏は先に示した著書『学力を問い直す』の中で次のように分析しておられます。すなわち、「どんなに『学力低下』論が叫ばれようとも、また教育行政がどんなに『基礎学力の徹

底』を推進しようとも、子供たちは、もはや『東アジア型の教育』の復古主義的な勉強の世界に回帰することはないでしょう。〈勉強〉の時代はもう終わったのです。いくら〈勉強〉に打ち込んでも、もはや、その行く手に希望もなければ幸福もないことを、子供たちは、時代に対する感受性によってよく知っています。そして子供たちは〈勉強〉の世界から離別し、〈学び〉の世界を求めてさ迷っています。時代の転換点を生きる子供と若者の孤独と苦しみに、私たち大人はもっと想像力を働かせる必要があります。」というわけです。

では、このような時代を生きる若者たちに対して、これからの大学教育はどのような対応を迫られることになるのでしょうか。すでにお気づきとは思いますが、こうした心の悩みを持った若者達を学びの世界へと誘うには、授業の技術的な改善や視聴覚教材の工夫、あるいはリメディアル教育などといった技術的な対応だけでは不可能です。それは、授業の技術的な面をいかに改善しようとも、肝心の授業そのものが、講義形式で物を教え込むことによって、若者を産業社会の一員として競争させ、その結果として社会階層的移動を活性化しようという古い枠組みを抜け出していないからです。若者は教え込まれた知識など、ポスト産業社会ではまたたくうちに古くなることを本能的に知っているのです。

授業に工夫をすればしたら、講義によって物を教える従来の授業ではなく、学生に問題を自覚させ学生の学びのモチベーションを育てる授業、そしてモチベーションの育った学生には「自律的な学び方を教える」授業へと転換を図るべきでしょう。そのための第一歩として、まず教室での教員の果たす役割を見直すことから始めるべきだと考えます。

生徒から学生へ

現代の若者の置かれている状況や抱える問題については上に述べましたが、それでは実際の教育の現場では、このような若者にどのような教育を施しているのでしょうか。また、そうした教育に問題は無いのでしょうか。6月に北海道大学で開催されました大学教育学会のパネルディスカッションで、河合文化教育研究所所長の丹羽氏が興味深い指摘を行っておられます。氏によりますと、本来高等学校と予備校とは授業の質において棲み分けをしていました。すなわち、高等学校ではそれぞれの科目内容を理解させ納得させることを主眼にした、いわば「納得型授業」を行い、予備校は早く正確に受験問題の解答を導く、いわば「正解発見型授業」を行ってきました。とこ

ろが第2次ベビーブームで激化した受験競争の結果、高等学校が受験に対応するために、正解発見型授業を行うようになってしまいました。このことは生徒達の基礎学力に影を落とし、高等学校卒業後に予備校へ通う段階で、納得型授業によって培われるべき基礎学力が身につけていないという現象を引き起こしました。つまり、受験勉強を始めようにもその前提となる基礎学力が欠けているというわけです。その後ベビーブームは去ったものの受験対策のための授業は生き残り、未だに高等学校では正解発見型授業が行われており、問題に気づいた予備校が納得型授業を提供するという事態を引き起こしているというわけです。なかには大学入学後も予備校に戻ってきて、予備校の講師との読書会を続ける学生までいるそうです。

つまり、生徒達は子供の時から「勉強」を強いられ「学び」の世界を知ることも無く大学まで入学してきていると考えられます。最近では大学でもこうした問題に気がつき始め、各地の大学でさまざまな取り組みが始まっているようです。近いところでは、関西大学文学部が学科を廃止、「学校インターンシップ」と称して、38の高等学校に延べ96人の学生を派遣して、サークル活動の指導などといったボランティアをやらせています。このような活動を行うことによって、学生は社会的、精神的に成熟し、大学で行う学習の意味を理解できるようになり、クラスは活性化しているようです。もちろん、こうしたやりかたには良いことばかりではなく、受け入れの問題など未解決の問題もあるようです。

いずれの大学も具体的な解決策を見つけているわけではなく、重要なことは問題点の所在を明確に理解して、それぞれの大学に合った導入教育を模索し続けることでしょう。その場合に、管理され強いられ「勉強」によって植え付けられた既成の価値観という呪縛から学生たちを解き放ち、自ら考える人間をつくるために、現代におけるリベラル・アーツの果たす意義を忘れてはならないということです。

「(生徒から学生への)移行」 を促す授業の具体例

それでは、こうした問題に気づいた個々の教員や大学が、授業の中でどのような工夫をしているかを2〜3見てみましょう。

① **問題発見型授業**:北海道大学の鈴木誠教授は、「蛙学」というタイトルで学生に授業をさせる方法を採用されています。北海道大学は高等教育機能開発総合センターのもとに、入試部門、教養教育部門などを設けて、学士課程教育を

入試から教養教育を経て学部の専門科目まで、高等教育機能開発総合センターで文字通り総合的に構築していく仕組みになっています。鈴木先生はその教養部門で理学部の学生を対象に「蛙学」を実践されているのです。

「蛙学」の内容をかいつままで申しますと、蛙など触ったことも無い学生に、たとえば蛙の解剖などに必要な最低の知識は教えますが、あとは学生に自由に調べさせ教員に代わってクラスの仲間を相手に授業をさせるものです。すると学生の関心によって、生物学的な面から授業をする学生、月には蛙が住んでいるという地域の伝説を調べ、蛙にまつわる文化史を取り上げる学生、または蛙の料理法を授業する学生など様々に面白いものがでてくるようです。その場合に教員は相談相手でしかなく、従来の教員の役割とは違った役割を担っているようです。こうした授業もやがて1年経過すると、明らかに学生達には変化が見え始め、自然と人間との関わりが「実感として」分かるようになり、学問のことばを理解できるようになって学生としてのスタートラインに立つことができるまでに成長を遂げるそうです。

② **ゲーム型授業**:京都文教大学の中村博幸教授は、1年生を対象にオリエンテーリングのやり方を導入教育に持ち込んでおられます。まず、学生にオリエンテーリング用の用紙を渡し、「オリエンテーリング」と称して、教員の研究室を訪問させます。現今の新生生にとっては、ちゃんとアポイントメントを取って大学教員の研究室を訪ねるだけでも実は大変な勇気の要ることなのです。幾人もの教員の研究室を訪ねた学生は、オリエンテーリングの要領で、自分が教員達の研究室を訪ねた日時を所定の用紙に記入していきます。そうして、様々な教員の研究室を訪ねた後で、自分で気に入った教員をファーストイヤー・ナビゲーターとして選び、履修登録や大学生活一般についての相談相手となってもらいます。こうすることによって、学生は大学になじみ、大学生活へスムーズに移行できるようになるようです。

③ **人間力教育**:金沢工業大学は、既に有名であり、全国的にも良く知られていますので、金沢工業大学のホームページからの引用をお示しします。「KITは、能登半島にある海洋研修施設『穴水湾自然学苑』にて1年次、2年次、3年次の全学生を対象に、2泊3日のスケジュールで『人間と自然』という必修科目を実施しています。8人〜12人のグループに分かれ、日中は海洋活動を体験、夜はグループ討議を行い、討議のまとめを最終日に全体発表する科目です。チームワークとリーダーシップ、コミュニケーション能力を育成するプログラムで、1年生にとっては友達づくりの絶好の機会となっています。」

「導入教育」を考える場合の視点

上記のような事例を考えると、導入教育には大きく分けて二つの種類があるようです。ひとつは大学入学後に自律的な学びのできる学生に育てることを狙ったもの、もうひとつは、精神的には既に自律的な勉学のできる学生にたいして、大学での勉学に必要なスキルを身につけさせることを狙ったものです。私は、前者の場合をイニシエーション型導入教育、後者の場合をスタディスキル型導入教育と名付けています。もちろんこの両者にははっきりと境界があるわけではなく、両方の要素が、対象となる学生に応じてバランスよく組み合わされていることが大事であると思っています。

高大接続の必要性

これまで述べてきたような学生の変化を考えると、導入教育は高大接続の一環としても考えておく必要があると思われる。すなわち、学生達の人生において高校教育の持つ意味や大学教育の持つ意味が変化し、従来であれば高校の段階で、ある程度は追及しておくべき「自分探し」、すなわち自己と社会とのかかわりの確立を大学入学後に追及し始めざるを得ないのが多くの現代の若者達の姿のようです。

そのように考えると、当然入学選抜のありかたも従来とは異なる方法を考えねばならないことは明らかです。つまり、基礎学力のみを基準に学生の選抜をすることには限界がきており、むしろ大学での「学び」の世界へ入るための資質とは何かということに視点を置いた選抜の方法を考えるべきでしょう。私は、具体的には「知的好奇心を持っているか」、「知的に意味のあることと、そうでないこととの判別をつける能力を持っているか」、「大学で自分に必要な科目やコースを選択する能力を備えているか」などの点を見極める入学選抜の方法を確立する必要があると考えています。

そして、導入教育とは、こうして入学してきた生徒達に、自律的な学びを中心とした大学教育を受けるために必要な人間的な成長とスキルとを身につけさせるものであると思います。

以後、出席者から様々な意見や話題が出されたので、その内容を箇条書きにしておきます。

まず「東アジア型」という概念について議論となりました。東アジア型とは、知識獲得競争を勝ち抜くことによって個人が社会階層的に上昇していくことを学びの動機付けとしている、古いタイプの教育であり現代では通用しないのではないかと。むしろ、現代では「課題探求能力」とよく言われている、新しい学力観こそが大事であろう。つまり、大学では“learn how to learn.”「学び方を修得する」ことが大切だと思われる。

リベラルアーツについては、ヨーロッパとりわけイギリスの教育について話題となった。その後、若者が自己を確立して行く過程で、自分の生まれ育った世俗の価値観をいったん壊し、そこから抜け出すことによって個人としての自己を確立することができるのではないかと話題となった。昔の若者場合には高等教育機関で西洋的価値観を学ぶことによって、そうした成長が可能であり、同時にそれは日本の近代化が進む方向とも一致していた。しかしながら、そうしたやりかたが、自己を確立する有効な手段であり得た時代は既に終わっていることなどが話題となった。それでは、現代の若者は自己を確立するときに拠って立つものとして何が考えられるのか、また教育として制度的にそうした若者の育ちを助けるときに何ができるのか等々、興味深い議論が行われた。

FDサロンレポートとは

大学教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FDサロン」を2002年10月から開催しています。

大学教育開発センター運営委員が、話題提供者をコーディネートし運営されています。話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として定着してきました。しかし、開催時間や開催場所の問題から、参加ができないとの声も聞かれます。そのようなことから、FDサロンでの話題をもっと全学に環流させ、FDの取り組みを深めていくためにFDサロンレポートを発行することといたしました。

FDサロンレポート 04-3

発行日：2005年1月14日

発行：龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

TEL. 075-645-2163 FAX. 075-645-2190

<http://www.ryukoku.ac.jp/fd>